

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アンデス文明の起源を求めて：
日本アンデス考古学調査50周年記念シンポジウムより

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008359

アンデス文明の起源を求めて

日本アンデス考古学調査 50 周年記念シンポジウムより

関 雄二 (国立民族学博物館教授)

記念シンポジウムの幕開け

1958年、東京大学文化人類学教室が中心となって始まった日本のアンデス考古学調査は、今年で50年を迎える。この節目の年に、ペルーと日本両国で、記念のシンポジウムやワークショップが開かれている。ここでは、9月に執り行われたペルーでのシンポジウムについて触れながら、50年の調査の意味を考えてみたい。

晩冬の薄曇りの中、9月2日、一連の行事の先頭を切って開かれたシンポジウムは、美しく、また荘厳な空間で開かれた。国立サン・マルコス大学カソナ文化センターという、リマ市中心街に位置する植民地時代から共和国時代にかけての修道院を改装した場所は、セレモニー会場としては申し分なく、なかでも、シンポジウムの舞台となった学位授与と伝達サロンは、18世紀にさかのぼる豪華な装飾が施された教会堂であった。

1時間程度ならば遅れることは当たり前前のペルーでは珍しく、定刻の午前11時ちょうどにセレモニーが始まった。社会科学学部長の歓迎の言葉、目加田日本大使の挨拶に続き、1960年より、今日に至るまでほぼ半世紀もの間、調査団に身を置き、研究活動を続けてきた大貫良夫東京大学名誉教授(現リトルワールド館長)が、50年の調査を振り返る講演を行い、これに続いて筆者による「パコパンパ遺跡調査プロジェクト報告」、さらにはサン・マルコス大学教授エルナン・アマット博士による「ペルー人から見た日本調査団の評価」という発表が続いた。ここでは、大貫教授が指摘した、調査初期の関心から話を始めてみたい。

日本人による考古学調査が開始された1958年、そしてこれに続く60年代における最大の関心がアンデス文明の起源にあったことは間違いない。

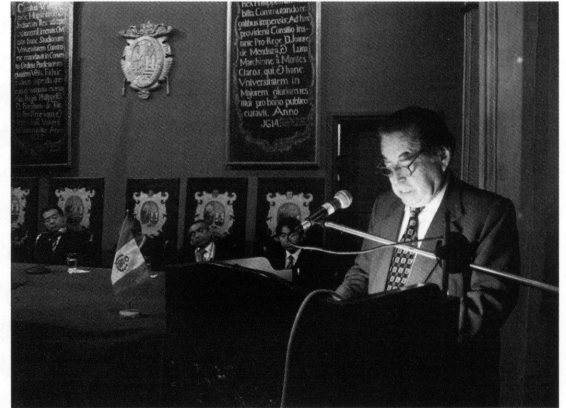
起源論の背景

ペルー考古学は19世紀末から20世紀の初めにかけて、ドイツ人考古学者マックス・ウーレとペルー人考古学者フーリオ・C・テーヨによって、本格的に始動したといえる。この2人は、編年、層位発掘など、近代的、学術的な考古学手法と概念を導入したことで知られるが、アンデス文明の起源を巡っては、全く異なる論を展開した。アンデス文明の起源は、アンデス地域自体には見出せないとし、中米に起源を求めたウーレに対して、テーヨは、あくまでアンデス域内、ペルー国内にこだわったのである。

テーヨがアンデス域内に執着した理由は、彼が生きた時代と置かれた立場に関係する。19世紀末から20世紀のはじめにかけて、ラテンアメリカではインディヘニスモの思想・運動が席卷する。先住民主義と訳されるこの思想は、外国資本による近代化が進み、土地接収などにより貧困に追いやられた先住民を救済、擁護する必要性から発生したといわれる。国民統合を推進する当時の政府も、イデオロギーの柱として採用し、その証のひとつが、先住民出身の考古学者テーヨの国立考古学博物館長への登用であった。

いわばナショナリズムと先住民擁護の思想が合体していたわけで、こうした中、テーヨが固執したのは、ウーレの中米起源説の論破であった。自文化の強調を課される環境に身を置き、また自らもそれを目指したテーヨにとって、アンデス文明の起源を、アンデス地帯内部に求めることは何ら不思議なことではなかった。

このように、20世紀初頭のペルー考古学の潮流は、アンデス文明の起源探究であり、テーヨの死後もこの傾向は強かった。そこに新参者として登場したのが日本調査団であった。50年前、最初の調査団を



熱弁をふるうアマット教授

温かく迎え、惜しめない協力を示してくれたペルー人考古学者が、テーヨの高弟たちであったことも関係し、日本調査団は、初期から迷うことなく文明の起源問題に立ち向かうことになる。

もともと、日本側の事情もあった。明治維新以来、西欧的近代化路線を追随してきた日本は、敗戦により、社会発展モデルの見直しを迫られていた。復興間もない時期に、海外調査が実現できた背景には、こうした日本社会全体の希求が潜んでいたといえよう。すなわち海外調査は、西欧にとって代わる多様な文明形成モデルの提示が使命の一つでもあったことになる。その意味で、文明の起源に学術的関心が向くのは必然であったといえよう。

こうしてペルー、日本双方の社会のベクトルが重なり合った状況下で開始された日本のアンデス調査は、文明の胎動期である形成期という時代に焦点を合わせていくのである。

チャビンへの関心

大貫教授の講演で指摘された、文明の起源に対する日本調査団の関心は、ある意味でチャビンと呼ばれる文化・様式・時代への関心であったと言い換えてもよい。もちろん、このチャビン問題も、テーヨの時代までさかのぼる。放射性炭素年代測定がなかった時代にもかかわらず、テーヨは、ペルー各地の遺跡を踏査し、

鋭くもチャビンをアンデス文明の母体となる文化であると看破したのである。チャビンの名自体は、北高地の山中に眠る形成期の代表的な遺跡チャビン・デ・ワントルの名に由来する。ユネスコの世界文化遺産に登録され、今年、日本の文化無償援助で、立派な博物館も建設されている。

さてテーヨが目にしたのは、各地で見られる遺構や遺物に表現された図像の共通性であった。なかでも、チャビン・デ・ワントル遺跡は、この面で量質ともに他の遺跡を圧倒し、なおかつ複雑な遺構をかかえていたことから、形成期の文化は、ここより各地に拡散した結果と考えたのである。

一方で、あまりにチャビン・デ・ワントルの遺構や石彫が洗練されていたがゆえに、チャビンの前身となる文化の存在も想定し、それ自体をアンデス山脈の東斜面、すなわちアマゾン地域に求める考えも提示している。チャビン・デ・ワントルの石彫などに現れた図像に、アマゾン起源の動植物や文化要素が見いだされたからである。テーヨ自身は、証明することなく世を去ったが、この仮説を発掘調査によって初めて検証したのがじつは日本調査団であった。

検証作業の舞台となった遺跡は、アンデス山脈の東斜面にあたるワヌコ県に位置するコトシュ遺跡である。1960年より発掘調査を始め、チャビン期ばかりでなく、その下に埋もれていた先チャビン期の遺構や遺物の存在を確認した。そして、最後には、土器製作が始まる前の時代（先土器期）にあたる「交差した手の神殿」までも発見したのである。

神殿研究への移行と日本調査団の特徴

コトシュ遺跡での発見は、その後の日本の研究の方向性を決定づけることになった。実際に、コトシュの後も、日本調査団は、ラ・パンパ、ラス・アルダス、ワカロマ、クントゥル・ワシなど、終始一貫

して、形成期の神殿遺跡の発掘調査を続けたのである。これらの遺跡に加え、調査団から巣立った新世代の考古学学徒が手がける遺跡を合わせてみれば、調査対象は相当な数にのぼる。その数もさることながら、いずれの調査でも、編年が打ち立てられ、形成期全体の編年体系の確立にも貢献している、という大貫教授の指摘は重要であろう。

日本の考古学関係者には、当たり前のよう聞こえるかもしれないが、編年の確立は、アンデス考古学では軽視されてき



サン・マルコス大学におけるシンポジウム

た分野である。この点は、日本でも、アメリカ考古学全体に対する批判としてよく聞かれるが、北米や中米では、きちんとした遺物分析が行われ、編年に対する言及も多い。むしろアンデス考古学特有の問題点であるような気がする。

大貫教授が指摘するもう一つの日本調査団の特徴とは、長い試掘溝（トレンチ）を入れる調査方法である。大型の祭祀遺跡の場合、錯綜する建築の供伴関係をおさえなければ、出土遺物を正確に扱うこともかなわず、編年の確立すらままならない。たとえば、大型の土留め壁（擁壁）を支えるために、壁の裏側に詰め込まれ

た、いわゆる裏込め部分などは、作業過程で何層にもなることが多いが、この層の重なり自体は、時間的、あるいは文化的にはあまり意味を持たない。一度の建設過程で積み上げられた土台であるからだ。何メートル積みあげられようとも、一時期の扱いとすべきである。試掘溝方式を採用すれば、その手がかりを得ることが容易にできるが、数メートル四方のグリッド型発掘では、見逃す可能性が高く、重なり合いを時代差によって生じたと、見誤ることすら起きる。

これらの指摘は確かに重要ではあるが、今や、日本の調査研究が評価されるべき点は、これにとどまらないように思う。

神殿研究の意味

コトシュの「交差した手の神殿」の発見は、さまざまな点で衝撃的であった。建物の内壁に設けられた壁がんの直下に、2対の交差した手のレリーフが飾られていた。また上塗りが施された床は、部屋の中央で一段低くなり、床の中央には炉が切られ、地下式の煙道が、部屋の外まで伸びていた。どう見ても、日常用の住居ではなかった。とはいえ、当時の文明史観では、狩猟採集から農耕定住へと社会が移行し、土器が製作され始め、余剰生産物が発生するのに伴い、社会の拡大化、さらに神殿の建設が始まるという図式が一般的であった。そこに土器製作以前にさかのぼる「交差した手の神殿」が発見されたのである。言い換えればそれほど大きな社会が誕生していないはずの時期に、すでに神殿が建設されていたことになる。

今でこそ、専門書やペルーの歴史教科書にコトシュの名が登場することは珍しくもなくなっているが、当時は、日本という研究後発国から発せられた文明形成過程についての筋書きの変更など欧米の学界が素直に受け入れるような雰囲気ではなかったという。

このように「交差した手の神殿」の発見は、文明観のコペルニクス的変更を導き出すことに成功したが、じつは、それ以上の考古学的意味が隠されていた。確かに、以前からアメリカ人考古学者は、「コトシュ宗教伝統」という概念を提示し、この遺跡の調査結果に大きな評価を与えてきたが、彼らが指摘したのは、単に建築の特徴とその地理的分布だけであった。

むしろ私たちが注目したいのは、類似した特徴を有する遺構が重なっているという現象の方である。神殿が一定の間隔において意図的に埋められ、その上に再び同じ構造が建てられるという更新過程が認められたのである。この更新過程は、その後行われた別の遺跡の調査でも次々と確認されたので、「神殿更新」と名づけることにした。もちろん、これは、発掘当時に思いついたというよりも、1998年に上梓した「文明の創造力」の中で正式に展開した考え方であった。調査を開始して実に40年後のことであり、逆に言えば、蓄積されたデータの中から帰納的に導き出された成果であったともいえる。

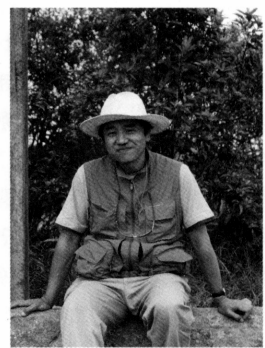
「神殿更新」は、土器が製作される以前から比較的小さな社会で開始され、社会の拡大や複雑化を牽引していったことがわかったのである。いうなれば「初めに神殿ありき」となろう。神殿が建設されるためには労働力を確保せねばならず、更新の度にこれが行われれば社会統合の契機ともなろうし、労働のコントロールを通じて、権力や階層化の発生へとつながることにもなる。また協同労働の必要性は、食料増産を後押ししたことも思いつく。つまりすべては従来いわれてきた、「経済的基盤の安定と余剰生産物の拡大から、神殿の成立、社会の発展を考える」理論とは逆で、「神殿更新」が社会変化を引き起こしたことになる。

このように、文明形成初期における神殿の重要な役割を考えると、従来の形成期という時期も、土器の登場を基準にするのではなく、もう少しさかのぼらせて神

殿の登場をもってその始まりとする方がわかりやすい。事実、最近では、土器製作以前にさかのぼる巨大な神殿遺跡の発見が後を絶たず、われわれの見方が間違っていないことが示されつつある。

今は、神殿更新説を受けて、私を含むさまざまな日本人研究者が、別の遺跡で検証作業を行い、修正やバージョン・アップさせた理論を構築しようと努力している。明らかに、われわれ日本調査団の研究は、次のレベルに入りつつある。着実なデータの集積を下に、語り始めた日本人考古学者の動向に、果たして世界の考古学者は、どのように反応するのであろうか。楽しい時代になってきた。

それにしても100周年の記念シンポジウムはいったい、誰がオーガナイズするのであろうか。会場壁面に描かれたほほ笑むエンジェルの顔を見つめながら、つまらぬ心配までし始めている自分がえらくおかしかった。



関 雄二 (せき・ゆうじ)

1956年東京生まれ。国立民族学博物館先端人類科学研究部長・教授ならびに総合研究大学院大学教授。専攻はアンデス考古学、文化人類学。1979年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査を行い、形成期における社会の成立と変容を追究するかたわら、文化遺産の保全と開発の問題にも取り組む。単著として『アンデスの考古学』（同成社）、『古代アンデス 権力の考古学』（京都大学学術出版会）、共編書として『文明の創造力』（角川書店）、『アメリカ大陸古代文明事典』（岩波書店）、『他者の帝国』（世界思想社）がある。